

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	戦後初期、東北における中国共産党の宣伝戦略の展開 : 反ソ愛国運動前後における『東北日報』の報道を中心に
Author(s)	紀, 勇振
Citation	史学研究 , 302 : 26 - 48
Issue Date	2019-04-19
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055649
Right	
Relation	



戦後初期、東北における中国共産党の宣伝戦略の展開

——反ソ愛国運動前後における『東北日報』の報道を中心に——

紀 勇 振

問題の所在

一九四五年八月九日、ソ連は同盟国の要請によって満洲（中国東北部）へ出兵し、日本の関東軍を武装解除して満洲を占領した。その後、東北における国共両党と米ソ両国の対立が深刻化していった。牛軍氏、沈志華氏、楊奎松氏らは、ソ連崩壊の直後に公開された膨大な旧ソ連文書を利用して、政治、外交および軍事など様々な視点から、戦後の東北をめぐる諸勢力の關係の変遷と政治情勢の確定の過程を詳しく論じた。⁽¹⁾丸山鋼二氏は、東北における中国共産党（中共）の軍事力の構築と地方政權の樹立に関して、中共とソ連軍の間の暗黙の協力と公然の支援による武器援助という問題について検討した。⁽²⁾飯塚靖氏は、中共が内戦に勝利した重要な要因の一つとして、中共が東北においてソ連占領軍の承認や黙認に

よって、旧関東軍および満洲国の兵器工場を接収し利用できたことを明らかにした。⁽³⁾以上の研究は、政治、外交および軍事の諸方面から戦後の東北における諸勢力の關係の変遷過程を詳しく描いたが、中共が重視する「第四戦線」である「宣伝戦線」には注目していない。

革命戦争において、「一枚のビラの効力は十万の銃砲より強い」⁽⁴⁾と認識していた中共にとって、プロパガンダは政權を獲得する過程で重要な役割を果たしたといえる。⁽⁵⁾この時期の中共など諸政治勢力のプロパガンダの研究に関しては、以下のようなものがある。余敏玲氏は蒋介石のイメージに関するプロパガンダの分析を通じて、国共内戦期における国共双方の宣伝闘争を検討した。⁽⁶⁾また、中共が一九五〇年代の中ソ友好協会の様々な活動や政治工作を通じて、中国民衆のソ連に対する無知や不満を、理解と敬服へと変化させたことを指摘し

た。鄭成氏は『実話報』と『大連日報』の記事を比較して、旅大地区の行政運営、経済活動、対外宣伝について分析し、中共とソ連軍占領当局との間に居民住宅や経済政策を巡る衝突があったことを明らかにした。しかし、その分析は、特別地域としての旅大地区に留まり、それ以外の東北地区におけるソ連と中共との協力関係および矛盾に言及していない。梅村卓氏は、東北地域において日本のメディア機構を接収した中共が、対内、対外的なメディアを積極的に利用し、統治の確立に努め、内戦の勝利のために動員したことを指摘した。また、中共が李兆麟殺害事件を政治問題化し、拡大化することにより、国民党および国民政府の宣伝に反撃したことを明らかにしている。東北抗日聯軍による抗日の功績を中共の統治の正当性に位置付ける宣伝についての指摘など、梅村氏による李兆麟殺害事件を巡る中共の宣伝戦略の分析は示唆に富む。小論は、梅村氏の成果にも学びつつ、ソ連イメージについての宣伝が中共の宣伝戦略の中にいかに位置付けられるかという問題に着目して、戦後初期から李兆麟殺害事件にいたるまでの中共の宣伝戦略について検討したい。この作業によって、中共の政権の正当性の主張に関わる宣伝戦略の転換の過程がより鮮明になると考える。また、中共が主張する東北抗日聯軍の「抗日の歴史」が、内戦当時の中共の政治的必要性により生み出されたプロパガンダの性格が強いものであることも、宣伝戦略の転換過程を分析する中で明らかになるであろう。

ソ連占領期間（一九四五年八月—一九四六年五月）の東北において、ソ連軍兵士による掠奪、暗殺、性暴行および暴力事件などの行為は、東北民衆に深刻な影響を及ぼし、ソ連に対するイメージを悪化させた。反ソ的な民族感情が東北に長期的に継続しており、一部の世論は中共をソ連の手先と認識したために中共に対しても反感を持つようになった。特に一九四六年二、三月には、中国全土において、青年学生および社会各界による民族的愛国主義の精神に基づく「反ソ愛国運動」が展開されるようになった。この運動において、全国の世論はソ連軍の撤退延長、経済協力の強要などを批判した他、国民政府による接収を阻止して東北に武装割拠する中共に対しても激しく批判した。このような状況は、大衆路線の下、民衆の動員を通じて自身の勢力の拡大および東北根拠地の樹立を意図する中共にとって非常に不利であった。そして、東北における権力基盤の確立のために、ソ連との協力が不可欠であると認識していた中共は、ソ連イメージの問題に注意せざるをえず、中共占領区において対ソ友好の社会的雰囲気を作り出さなければならなかった。

確かに、中共組織が合法化されたのにもない、民間の各種友好団体が多く樹立された。このような中共系の組織が東北の民衆に対して政治工作を行い、民衆のソ連およびソ連軍に対する感情は一九四六年二月頃には、友好的になりつつあった。しかし、中共の宣伝機関は民族意識の強い民衆に「なぜソ連軍が東北から撤退しないのか」、「なぜソ連と協力しな

ければならないのか」について説明する必要に迫られることとなった。そして、東北における中共とソ連の間の共通利害による協力関係が世論の批判を招いた。したがって、中共は東北における支配の正当性を確保するために、東北社会の世論の支持と理解を獲得する必要性が生じた。中共の宣伝機関は、党の指導政策の調整に応じてどのように宣伝方針を転換させていったのか。本論では、中共東北局機関紙である『東北日報』における反ソ愛国運動前後の報道の分析を中心としながら、この問題について考えたい。

中共東北局の機関紙である『東北日報』は、一九四五年一月一日に瀋陽で創刊されたが、東北日報社の安全を守り、かつ中ソ友好同盟条約において規定された、国民政府を正統政府として承認するというソ連軍の外交上の立場に配慮して国民政府軍（国府軍）が山海関に進攻するまで発行地を山海関とし、発行者も東北日報社とのみ記していた。最初の発刊部数は数千部であり、最大で二〇万部に達した。『東北日報』は発刊当初、主に東北の中共軍に無償で配布されたが、一部民間に販売された。その影響範囲は発行地とその周りの市村であった。東北における内戦の進展により、東北日報社は東北局とともに瀋陽、本溪（一九四五年一月二三日から一九四六年二月二日）、龍海（一九四六年二月七日から一九四六年四月二二日）、長春（一九四六年四月二八日から一九四六年五月二三日）、ハルビン（一九四六年五月二八日から一九四八年一月末）へと移動して、一九四八年、中共

の東北での全面勝利後に再び瀋陽に戻って発行を再開した。⁽¹⁶⁾『東北日報』は創刊から一九五四年八月三十一日の停刊までの八年一〇カ月の間、東北根拠地創立の段階から、中華人民共和国成立後にいたるまで東北の宣伝戦線において重要な役割を果たしたといえる。

『東北日報』は中共東北局の機関紙として、「革命的立場」に基づいて宣伝を行う⁽¹⁷⁾「人民の教科書」という性格を有している。すなわち、中共宣伝幹部呉亮平によれば、事実であるか否かを問わず、党の必要に応じて作り出された情報および思想を、社会に十分に説明し、理解をうることを任務としている⁽¹⁸⁾。さらに、宣伝は軍事行動のために世論を動員できるだけでなく、民心をえて占領の正当性を構築できると考えられていた。⁽²⁰⁾

本論では、国民党機関紙、全国的な商業新聞、中共の内部文書、当事者の回想などの史料も使用して、全国的な政治情勢や世論の動向および中共内部の政策方針との関係にも注意しながら、東北における中共の宣伝戦略の変化について分析を行う。

I、戦後初期の政治情勢

(一) 国共談判と東北における国共対立

中共の宣伝方針は各時期の情勢に応じて調整されてきた。この時期の中共の宣伝方針の変化について理解するため、中

国、特に東北地域の政治情勢について先に述べておきたい。

早くも一九四五年五月、米ソは既にそれぞれの利害に基づいて、中国において蒋介石の指導による統一的、かつ民主的な中央政府を樹立することについて合意した²¹⁾。戦後、中国における日本降伏後の権力の真空に乗じて、占領区を拡大して内戦での優位な地位を勝ち取ることを意図した毛沢東は、ソ連の要求に従わざるをえず、蒋介石の要請を受け入れて、重慶談判に赴いた²²⁾。一九四五年八月二日から一〇月一〇日にかけて、国共双方は、政治の民主化、軍隊の国有化、解放区の地位などについて協議し、蒋介石の指導に基づいて中国における三民主義を実現するため、長期にわたって合作することと合意し、この合意は「政府与中共会谈纪要」(「双十協定」)としてまとめられ、内戦が一時的に回避された。

しかし、中共は軍事的にも各占領区の統治を確保するため、鉄道沿線で国府軍の華北への進出を阻止した他、山西を接収する閻錫山軍の部隊を殲滅し、同年の一二月まで包頭、帰綏の傅作義軍を包圍攻撃した²³⁾。また、中共は国府軍を山海関内に止まらせるために、国民政府に東北の経済合作を迫るソ連軍と協力して、国府軍の東北への上陸を阻止した²⁴⁾。さらに中共は東北において国民政府の接収を阻止しながら、積極的に地方政権を樹立し、中共軍を拡大した。一九四五年一月にいたって、国民政府は行政による接収に失敗すると、一一月一日に国府軍を秦皇島に上陸させ、同軍は一六日に山海関を突破して東北に進出し、二六日には錦州を占領した²⁵⁾。これ

より先の一一月四日、中共中央は、劉伯承ら晋冀魯豫軍区幹部に対し、国府軍の華北、東北への進攻を全力で阻止して東北における国府軍に対する作戦を支援すること、およびソ連軍の撤退とともに、東北自治を宣言する方針を伝達していた²⁶⁾。国民政府は、中共が軍隊を組織し、隴海線北の諸省の行政権を要求するのは武装割拠であり、それによって、中共占領区に対する中央政府の承認を強いることは、ソ連を外交的に利する行為であると認識した²⁷⁾。一九四五年十二月三日、国府軍に対する軍事上の敗北と米ソの圧力に直面した中共は、公開で「平和的に東北問題を解決しよう」と呼びかけ、一九四六年一月五日に国共双方は停戦協定に合意し、一〇日に停戦令が公布された。そして、一月一〇日から三一日にかけて、国共両党および中国民主同盟、青年党、民主社会党の五者代表の三八人は重慶の政治協商会議に参加し、平和建国綱領などの五項決議案に合意した²⁸⁾。

しかし、この段階において、平和の枠組みは整えられたが、平和の現実には存在しなかったといえる。中共の宣伝機関は、世論の動向に対応しながら平和、民主、団結を要点として宣伝していたが、その核心的な目的は、民主および平和を唱えながら、国民政府に中共自身の合法的地位を承認させ、中共占領区の合法性を勝ち取ることにあった。すなわち、国民政府が中共の既有権益を承認しない限り、中共は闘争を放棄することはなく、平和の実現には困難な状況が存在していたといえる。そして、政治協商会議の開催期間およびその

後、重慶において各種の政治衝突が頻発していた。中共は一連の事件を「国民党反動派が政治協商会議決議を破壊する陰謀である」と批判し、民主同盟とともに反国民政府の一連の学生運動を画策した。かつ、中共は各種のメディアを通じて、様々な政治衝突を拡大して国民政府の権威を貶め、自身の政治要求を訴えた。

(二) ソ連軍占領下の東北と反ソ愛国運動

ソ連は対日作戦前に「ヤルタ密約」と「中ソ友好同盟条約」および同附録により、帝政ロシアが喪失した満洲特権を取り戻した。さらに、ソ連軍は東北に入るとともに、計画的に東北の機械・鉱産、農産物などに対する略奪を始めた。したがって、東北各地では、工場が再開できず、失業労働者が大量に発生し、東北民衆の生活に重大な衝撃を与えたのである。また、東北民衆の食糧は日本および満洲国政府に徴用されたのみならず、ソ連軍にも強引に売却されてソ連に運送された。こうした機械や農産物などに対する略奪よりも、各地で発生した民衆の財産の強奪、性暴行、殺人などは、民衆のソ連軍に対するイメージをさらに悪化させた。それに留まらず、ソ連軍の略奪・暴行は、中共の軍隊や地方政権の樹立にも悪影響を及ぼし、元々ソ連およびソ連軍に対して敬意を示していた中共人員もソ連軍の粗暴な行為に不満をもらしていた。中共軍幹部の黄克誠は、「我々の政治幹部が養成したソ連軍に対する部隊の尊敬の感情は、ソ連軍の物資、機械の搬送およ

び強姦の行為により破壊された」と感嘆した。

さらに、一九四六年二月一日、英米ソ三国は一年前に調印した「ヤルタ密約」を公開した。英米ソ三国が中国の主権を無視し、「外モンゴルを独立させ、ソ連に帝政ロシアの満洲特権を取り戻させる」内容を秘密裡に決定したことが明らかになり、全中国を震撼させた。一九四六年二月上旬、国民政府の接収人員張莘夫が東北民主聯軍に殺害された事件とともに、ソ連軍の略奪や暴行の情報が東北以外の地域に報道されるにつれて、略奪・暴行ばかりでなくソ連の東北における特権に対しても批判の声上がり、重慶、南京、北平など各地で大規模な反ソ愛国運動が展開されるにいたった。反ソ愛国運動の批判の矛先はソ連のみならず、中共にも向けられるようになった。

一九四六年二月二日、重慶市沙磁区の大学・中学校の学生らは愛国デモを行なった。反ソ愛国運動の主旨は、中国民衆の東北問題に対する関心を喚起して、ソ連が中ソ条約を遵守し、ソ連軍を東北から速やかに撤退させることを要求するものであった。また、東北地区で自立傾向を高めようとする中共も批判の対象となった。中共に対して、停戦協定および政治協商会議決議を守り、黄帝の子孫として良心を持ち母国を愛すべきだと要求するものであった。さらに、如何なる口実によっても中共の東北割拠や国土のソ連への分割は許さないと主張し、民主聯軍や「非合法の傀儡地方政権」を取り締まるべきだと訴えた。また、「質中共書」では、「現在にいたつ

でも兵士の復員問題が順調に進まず、国家建設が直ちに開始できず、政治協商会議決議が実現できていない」原因は、「中共が東北において非合法の地方政権や非合法の民主聯軍を組織して、国民政府の東北の接収と国府軍の東北進出を阻止している」ためであると批判した⁽⁴⁷⁾。

重慶の学生の反ソ愛国運動を契機に、一六日から三〇日にかけて、貴州、南昌、上海、北平、天津、漢口、青島などにおいて、前後十数万人が参加した反ソ愛国デモが次々におこなわれた。愛国学生の反ソデモだけではなく、大学教授、社会各界の人士は、宣言・通電などを発し、ソ連が条約を守り、東北の機械や物資を返還するよう訴えた。さらに、国民政府に対し、秘密外交を止めて、対外交渉を透明化させ、ソ連の道理に合わない要求を固く断ることを要求し、「国内の各政党が団結して東北の特殊化に反対し、外患に積極的に対応するよう」主張した⁽⁴⁸⁾。民間各紙も自身の立場を表明した。例えば『大公報』（天津版）は、「『中ソ友好同盟条約』はソ連の中国に対する特権を放棄する二回の宣言の後退だ」と評価し、「ソ連軍は早く撤退せよ⁽⁴⁹⁾」と要求した。また、「東北に進出する国府軍の数を制限すべきだ」という中共の要求に対して、「それは中国の主権を制限する問題であるため、内政の問題ではない」とし、「国家の主権が制限を受けるものとすれば、（中共が主張する）民主は民主といえない」（一）は引用者。以下同様⁽⁵¹⁾」と質した。『申報』は、ソ連の行為は中国の主権を侵害し、中国を侵略することであると、ソ連および中共を

日本および汪精衛政権と比較して、「同じように、ソ連は悪人であり、中共は悪人の手先である」として、「愛国と排外を区別すべきである」という中共の言論を激しく批判した⁽⁵²⁾。『民国日報』は、ソ連が東北の権益を求めることを批判し、「中共が東北人民の名義を借りて政府・軍隊を組織しないように」警告した⁽⁵³⁾。

反ソ愛国運動は、東北問題に関心を寄せ、ソ連軍の撤退延期と経済協定締結の強制を批判した他、中共が東北において「政府を組織し、国府軍の東北進出を阻止すること」も激しく批判し、「東北の不法政権」を取り締まり、「民主聯軍」を解散せよと要求した。それは、支配の実績のない東北において、支配の正当性の強化を求める中共に衝撃を与えたといえる。これに対して、中共は宣伝を通じて各種の政策や政治的概念、イデオロギーを東北社会に浸透させながら、自身の東北解放への功績をアピールする方針を採用するようになった。

II、『東北日報』の報道

(一) 反ソ愛国運動以前のソ連に関する報道

中共は東北における権力基盤と支配の正当性の確立のために、ソ連との密接な関係、現地ソ連軍の援助を必要としていた。そのため、本節では、『東北日報』がどのようなソ連イメージを東北民衆に伝えようとしたのかについて分析する。『東北日報』のソ連に関する宣伝を理解するために、具体的な事

例を挙げたいと思う。

まず、「中ソ友好同盟条約」に関する解釈である。「中ソ友好同盟条約」はソ連軍の東北駐留の根拠であり、中共は条約を好意的に解釈することで、ソ連の東北特権回収の意図を隠し、東北解放におけるソ連の貢献を強調する宣伝を行った。

一九四五年一月一〇日の『東北日報』は、「中露密約」と「中ソ友好同盟条約」とを比較し、「中露密約」は旧帝政ロシアが東北を侵略し、東北人民を奴隷とした不平等な帝国主義条約である」と批判し、「中ソ友好同盟条約」は偉大なソ連赤軍が長春鉄道および東北人民を解放してから、日本侵略者の復活を防ぐために、中ソ両国において「十分に平等かつ互恵」の精神に基づいて締結されたと評価した。⁽⁵³⁾さらに、「ソ連赤軍が東北に出兵し、日本侵略者を駆逐して三千万の東北同胞を解放し、日本侵略者に致命的な打撃を与え、倭寇を直ちに投降させた」とし、ソ連の東北出兵、対日宣戦などを賛美し、「ソ連の反ファシズム戦争に対する貢献が勝利の決定的な原因である」と位置づけていた。⁽⁵⁴⁾

『東北日報』は中共の「革命的立場」に基づき、「中ソ友好同盟条約」が実際には「中露密約」と同じく、ソ連が帝政ロシアの東北の権益を取り戻し、中国の主権を制限する事実を隠蔽した。「中露密約」と「中ソ友好同盟条約」の内容を比較すると、条約諸項目はほぼ同じである。各条約における東北鉄道に関する協定は、それぞれ「中俄合辦東省鐵路公司合同章程」（中露密約）と「中蘇關於中国長春鉄道の協定」（中

ソ友好同盟条約）であり、「章程」より「協定」の方が詳しく中ソ双方の権利と義務を規定しており、「協定」は人事権、運営権、管理権を有する鉄道管理局局長をソ連人に任せることを規定していた。⁽⁵⁵⁾それはソ連側の実際の権限を強化するもので、平等かつ互恵的だといえない。実際、一九四九年二月の初めに西柏坡を訪問したソ連側代表ミコヤンは中共中央指導部に、「中ソ友好同盟条約」が不平等な条約であると認めていた。一九四九年七月、スターリンもモスクワ訪問中の劉少奇に、「一九四五年の中ソ条約は平等ではない」と表明していた。⁽⁵⁶⁾

次に、旅順・大連（旅大）に関する報道である。一九四五年一月、『東北日報』は、ソ連赤軍が敵のファシズム政権を打倒したからこそ、大連市各公共団体代表会が開催できた。民主選挙により、遲子祥⁽⁵⁷⁾が市長に選出され、陳雲濤が副市長に選出された。⁽⁵⁸⁾「労働組合総会の要求により、ソ連赤軍が五百万の救済金を配り、大連の失業労働者を救済した」などと報道した。ソ連軍占領下の旅大で、人民は市長などを選挙することができた⁽⁵⁹⁾と強調し、政権の民主的な性格が主張された。また、ソ連軍による失業労働者への援助を報道し、ソ連軍の友好的な態度を強調している。

しかし、実際には遲子祥はソ連軍に指名されており、陳雲濤⁽⁶⁰⁾は中共系の人員であり、選挙以前から当選が内定していた。⁽⁶¹⁾また上述のように、ソ連軍によって多くの東北の鋼鉄、炭鉱、機械などの企業が略奪され、巨大な損害を受けていた

が、そのことについては報道されなかった。旅大地区においても多くの工場の生産が停止せざるをえず、それによる失業労働者も多かったのである。⁽⁸⁶⁾

最後に、「外モンゴル現状維持」である。中共は「中ソ友好同盟条約」が中国の対外条約の中で初めての平等な条約だと位置づけていたが、外モンゴルに関する問題を意図的に避けていた。⁽⁸⁸⁾『東北日報』も同じように、東北における敏感な民族主義的感情を刺激したくなかったのかもしれない。この問題に関して『東北日報』は、一九四六年一月二十九日に、「張家口市にある内蒙学院で外モンゴル独立の慶祝大会が開催された」という記事を掲載したのみであった。同記事は、「ソ連は弱小民族のモンゴル人に自由を与えた」ことを強調した。戦後、内モンゴルに隣接する張家口市が中共の統制下に入ったことでこのような活動が可能となったが、これらの活動と報道は、ソ連の「外モンゴル現状維持」に賛意を表明した他、中共とモンゴルなどの少数民族との連帯の意思も示した。⁽⁸⁷⁾

この報道は、事実のみを伝えており、中共の見解や東北日報社の評論などを掲載しておらず、記事の扱ひも小さく(二面の下段)、中共がソ連に協力して「国家分裂」を企てているという批判を避けようとする意図がうかがえる。外モンゴル独立の慶祝活動は、この記事に示された張家口市の内蒙学院の慶祝大会が確認できるだけで、東北を含むその他の例は確認できない。戦後初期に中共は、政権政党ではなく、かつソ連との良好な関係を維持するため、外モンゴルの独立に対し

て肯定的な態度を保持していたが、一九四九年二月、全国政権を樹立する段階にいたると、毛沢東はスターリンに「中国の外モンゴルに対する宗主権」の回復を要求している。⁽⁸²⁾

『東北日報』は、ソ連の肯定的なイメージを確立するために、社会、政治、軍事、科学などの様々の方面から社会主義国ソ連の先進性を紹介した。「ロシアの二月革命以降、ロシアにおいて資本主義政府と工農兵ソビエトが共存していたが、資本家および大地主を代表する資本階級政府が帝国主義世界大戦の離脱を望まず、パン、平和および自由を民衆に与えることもしな」かったと批判し、「レーニンおよびスターリンの指導に基づいたソビエト政権の樹立によって、人類の歴史上、搾取階級と被搾取階級を消滅させた新時代を迎えた」と評価した。そして、記事の中で、「東北同胞は武装して勝利の果実を防衛し、全国人民が立ち上がって、国民党反動派の内戦の陰謀を阻止しよう」と呼びかけた。このようなロシア革命の「偉大な成果」を讃える報道の他、ソ連の社会、科学、経済などについて具体的に紹介する報道も多かった。創刊から一九四六年の反ソ愛国運動にいたるまで、『東北日報』は毎日の国際面にソ連の各方面の具体的な例を挙げて、ソ連を全面的に賛美した。

この他『東北日報』は、ソ連およびソ連軍の東北解放に対する功績を意図的に高く評価した他、中共と「友」であるソ連とその指導下の東欧諸国の、積極的、民主、自由、平等、平和、団結の偉大なイメージを読者に示した。より重要な点

は、中共自身の「内戦を停止して平和的に独立かつ富強の中国を建設する」という主張も同時に提示して、ソ連と同じイデオロギーを持つ中共もすばらしいというイメージを付与しようとしており、長い間異民族に支配され「普遍的に共産党、毛沢東、八路軍を理解していない」東北民衆に「将来の強大な中国像」を示し、民衆の支持をえようとした。『東北日報』はソ連の肯定的なイメージと先進性を提示することにより、将来にわたって中国もソ連のような社会主義社会に入り、中国人もソ連人と同じような成果が享受できることを表明し、同じイデオロギーを持ち、民主を主張する中共は当然ながら中国人民を率いて理想社会に向かう政治勢力であると主張した。

(二) 反ソ愛国運動の批判に対する『東北日報』の弁明

全国で反ソ愛国運動が激しく展開する状況においても、国府軍の全面的進攻が開始される前の東北では、公開の反ソ運動は見られず、長春地区軍官学校、工業大学、法政大学学院、長春大学の学生らが、北平、天津へ請願に赴いたのみであった。一九四六年三月に国府軍が瀋陽に進入するにいたって初めてソ連軍の機械略奪に反対する学生デモが現れた。⁽⁷⁶⁾中共は東北の占領区において、軍事力で国民政府の接収人員を排除し、匪賊を殲滅する方法で親国民党勢力を消滅させるとともに、親共勢力を育成した。したがって、国民党勢力に従属する宣伝機関もそれにともなつて消失し、中共占領区には

中共の宣伝機関と親共的な新聞のみが存在していたと考えられる。

国民政府の統治区における反ソ愛国運動が盛んになると、一九四六年二月二五日、延安の中共中央は直ちに各中央局、分局に対して、「北平執行部、『新華日報』および『民主報』の破壊、重慶各地の反ソ反共デモにより、彼ら（反動派）が停戦協定、政治協商会議の決議を破棄し、米ソおよび中ソ関係を挑発して破壊するファシズムの陰謀が表面化し、米国の不満やソ連の反撃を招いた」と指摘し、「我々はこの時機をつかんで宣伝反撃を開始せねばならず、全力を総動員して国民党内のファシズム反動派を打撃し、反動的な氣勢を圧倒して反動的陰謀を碎き、彼らの停戦令の破壊、政治協商会議への反対、武力による東北問題の解決、公開での反ソ（活動）、米ソ関係の挑発による破壊、敵および傀儡との結託、特務活動の横行などの罪を、各地の具体的な事例と結合し、新聞、社論、談話、抗議、通電などを通して、激しく反駁しなければならぬ」と指示した。さらに、宣伝において以下の四点について注意喚起した。

- ① 国民党内のファシズム反動派と特務機関のみに反対し、これらの反動人員を必ず国家机关から追放すべきであり、そうすれば中国に自由、民主が実現できると強調する。しかし、一般的に国民党、国民政府および政府軍に反対せず、蒋介石に反対しない。政府が反動

派の不法な行動を放任し、奨励したという政策の間違いのみに反対する。国民党内の和平派と民主派に対しては、鼓舞して味方に獲得すべきである。

② 北平事件、重慶事件に参加した特務と民衆に対して、区別して対応すべきであり、一般的に民衆に反対しないが、厳正かつ善意によってその政治的な誤りを指摘すべきであり、その行動の誤りを指摘する時、反動派の罨にかからないよう、一般的に請願デモに反対せず、(国民党反動派が)これを理由に本当の民衆の請願デモを制限することを避けなければならない。

③ ソ連と東北問題に対する釈明について慎重にすべきである。我々は本当の愛国的立場に基づき、中ソ二大民族の友誼を維持し、中ソ条約を履行して極東の安全を守ろうと主張し、東北について、我々は平和解決を求め、国軍の平和的進入に反対しないが、反動派による東北での内戦、傀儡軍・土匪の改編、日本人との結託、張莘夫事件を作り出して、反ソ反共の口実とすることに反対しなければならない。

④ 批判の態度は道理を説くことに重点を置くべきであり、停戦令、政治協商会議決議および和平建国綱領に基づき、我が方が相手の何度もの挑発を我慢している事実をあげて、防衛の姿勢を取り、騒々しく怒鳴り散らしてはならず、多くの中間派民衆の同情を勝ち取るべきである。⁽²⁸⁾

東北における中共の支配の正当性が反ソ愛国運動の衝撃を受けると、『東北日報』も中共中央の指示に基づき、反ソ愛国運動を「国民党反動派」の陰謀と定義付ける報道を行い、党報として中共の東北支配の正当性の強化に尽力した。

『東北日報』は「反ソ愛国運動は国民党反動派の陰謀であり、国民党反動派がソ連およびその指導者スターリンを誇り、抗日戦争と民主運動の礎石—中国共産党を憎み、中国の民主勢力を敵視している」と宣伝し、「国民党反動派は日本侵略者の残余勢力と結託し、国家主権接収を阻止することおよびソ連軍と中共軍が解放した東北を占領して割拠することにより、満洲国の回復を企てている。愛国運動というものは、実は反ソ反共反民主の反動陰謀だ」と主張した。また、学生の「質中共書」も「中傷であり、荒唐無稽だ」と批判し、新華日報社襲撃事件は、「国民党反動派の反共陰謀が長い間計画されていたことを示している」と指摘し、「国民党反動派は蔣主席の停戦命令と政治協商会議決議に不満を示し、中国が間もなく平和、民主、団結および統一を迎える現在、反動派によって発動された」重慶反ソ運動は、「国民党内民主、平和を主張する指導者、民主同盟、中国共産党に反対するものではない」と強調し、「信義を重視するソ連は『中ソ友好同盟条約』に違反しないと信じる」と呼びかけた。さらに、「東北民主聯軍は抗日の愛国武装であり、東北各地の民主政府は東北人民の要求により組織された民主的な地方政府である」と指摘し、これは「しかも政治協商会議決議の規定による地

方自治を行うにすぎない」と主張した。『東北日報』は反ソ運動を説明する際、重慶の反ソ運動のみを讀者に伝えており、「数百人の隊列」や「千数百人の学生がデモに参加した」などの描写により、反ソ運動を「矮小化」して、東北民衆に対して「全国多数の民衆がソ連および中共を支持している」ように示す意図が明らかである。

また『東北日報』は、中共以外の様々な立場の人々が中共を擁護し、国民政府の対応や反ソ愛国運動を批判する言論を掲載し、中共の主張を補強しようとした。またこの段階において、国民党側の「終戦前、東北に中共軍は存在しなかった」という論調や、反ソ運動における「不法政權と不法民主聯軍を取り締まろう」という論調に対して、東北民主聯軍の対日作戦への貢献を強調する言論が現れるようになる（東北民主聯軍の問題については次の節で詳しく論じる）。東北著名人士の閻宝航らは、「現在の東北民主聯軍は十四年間対日作戦を堅持した人民の部隊であり、国民政府の東北接收行営は東北の民主人士を引き入れて、改組すべきだ」と主張し、「東北には三十万人の人民の武装があり、もし政府が軍事手段で東北問題を解決しようとすれば、依然として戦禍が避けられず、それは東北人民が見たくないことである」と国民政府に申し立てた。閻宝航は中共秘密黨員であったが、東北の「民主人士」の立場で中共を擁護する言論を行っていた。中国民主同盟の主席張瀾は「全国の團結民主を直ちに実現できれば、東北問題は存在しなくな」るが、「反ソ反共のみが解決でき

ない」と表明した。また、学生運動が国民党反動派に操られていることを主張するため、「国民党反動派は様々な手段を使い、各大学の学生を脅して重慶の反ソ反共デモに参加させ」、「燕大学生は国民党反動派の脅迫を無視し、デモに参加することを拒絶した」という報道を行った。その他、モスクワの放送を引用して、「去年から日本帝国主義の残余勢力がソ連赤軍の個別兵士を襲撃し、現在まで数十人が殺害され」、「倭寇と傀儡軍残余は国民党反動派と結託して、反ソ反共の宣伝活動を行っており、張莘夫殺害の罪名によってソ連赤軍を誣告するのはさらに下劣である」と批判した。以上のように、『東北日報』は二月二五日の中共中央の指示に従い、反ソ愛国運動を「反ソ反共反民主」の反動的陰謀と定義し、中共の立場が民主を代表するものと主張し、自身の正当性を強調し、国民党を、蔣介石を主とする「民主派」と反ソ反共の「日本帝国主義の手先・反動派」に分けて、東北人士、民主同盟主席、ソ連政府、デモに参加しなかった学生の発言を引用して、「中間派」を獲得し、「反動派」を孤立させようとしていた。

（三）東北抗日聯軍の貢献の強調と「李兆麟殺害事件」

東北における中共の地方政權および東北民主聯軍の正当性が疑われ、かつ一九四六年三月以降、ソ連軍の東北撤退が差し迫ると、中共は東北での支配の正当性を確保するために、東北の地方政權、特に東北民主聯軍の正当性を確立する必要

に迫られることになった。⁹⁵これ以降、東北解放の功績は、ソ連の軍事力よりも主に「中共の指導下」の東北民主聯軍の東北での長期的な抵抗に帰せられることになる。

一九四五年二月二日、中共中央東北局政務委員兼北滿分局書記の陳雲は中共中央および東北局に東北抗日聯軍の抗日の功績を宣伝することを建議し、一九四六年一月一日から北滿分局機関紙の『哈爾濱日報』とハルビン中ソ友好協会機関紙の『北光日報』に「東北抗日聯軍十四年苦闘簡史」を連載させたが、中共中央および東北局は反応しておらず、『東北日報』も東北抗日聯軍について集中的な報道を行っていなかった。しかし、一九四六年の反ソ愛国運動の展開にいたって、東北局は東北抗日聯軍に関する宣伝に注目するようになった。

一九四六年二月二七日、東北局書記の彭真は陳雲に対して、
①八・一五前の北滿洲各地抗日聯軍の活動状況（幹部の姓名、人数、時間、場所）および八・一五以降の発展過程、②現職の団以上の幹部の姓名、履歴などを収集するよう求めた。⁹⁶同年三月初め、中共中央は彭真に「東北における材料によって、東北十四年間の抗日戦争および抗日聯軍の歴史、抗日聯軍の将校と幹部および元東北軍將校呂正操、万毅、張学詩などの紹介、彼らの談話と通電を多く発表せよ」と指示した。⁹⁶彭真は再び陳雲に、「国民党反動派の反ソ反共運動および東北に関する反動宣伝に反撃するために、日本降伏前の、東北における我が党の抗日活動、特に武装活動と地下軍を系統的に世

界に宣伝する必要がある。速やかに宣伝できるよう、李兆麟、馮仲雲に早めに材料（とりあえず主要内容を電報で送るよう）を書いて送るように要請する」ことを指示した。東北局は以上の指示を受けて、東北民主聯軍の前身の一部である東北抗日聯軍の抗日への貢献をアピールし始めた。以下に、代表的な記事を例示する。

一九四六年二月末、『東北日報』には新華社記者による元東北抗日聯軍將軍周保中のインタビュー内容が掲載された。

周保中は、「蒋介石が不抵抗主義によって東北を日本侵略者に売り渡した」と指摘し、「九・一八事件後、馬占山など抗日の旧軍隊を助けるために、中共は迅速に愛国青年や中共幹部を動員して旧軍隊の抗日活動に参加させた」と主張している。しかし、「一九三四年頃にいたって、国民党派の旧軍隊の投降や逃走により、国民党勢力が完全に東北から消失した。それと反対に、中国共産党が東北の各抗日遊撃隊、抗日同盟軍、東北人民革命軍と聯合して東北抗日聯軍を結成し、日本侵略者および傀儡軍に深刻な打撃を与えた」が、「一九三九年以後、南方の国民党の消極的な抗戦のため、日本の関東軍が軍隊を集結して、全面的に東北抗日聯軍を攻撃したことから、やむなく我々はソ連へ撤退した」⁹⁸とする。また、「東北抗日聯軍は日本の関東軍を牽制して、敵を勝手に関内へ侵攻させず、陪都重慶が再移転しなかったことにも重要な貢献がある」と東北抗日聯軍の功績を主張している。そのみならず、戦後も「抗日聯軍は直接ソ連赤軍を助けて日本侵略者を駆逐した」

として、東北解放への功績をも強調した。したがって、対日抗戦の功績がある抗日聯軍が、「東北人民を守るための駐在、東北の各事業への参与」をすることが、「東北問題の解決の前提である」と主張した。⁽⁹⁰⁾「楊靖宇和他的隊伍」という記事においても、南滿地区における東北抗日聯軍の楊靖宇らの抗日活動の紹介を通じて、極めて困難な状況で死ぬまで日本侵略者および傀儡軍と戦った精神は賞賛に値すると伝えていた。⁽⁹¹⁾『東北日報』は、これは東北抗日聯軍の功績であるのみならず、東北抗日聯軍が中共に指導されていたからこそ、そのような素晴らしい功績を挙げることができたともアピールした。一九四六年三月一七日、『東北日報』の社論は、「国民党派の旧軍隊が逃走した後、中共の指導に基づいた東北の各中共組織は、抗日統一戦線政策を貫徹して東北の各愛国抗日団体と団結して東北の解放を迎えた。現在、東北抗日聯軍は抗日部隊である八路军、新四軍および東北の各地方保安団と連合して、東北民主聯軍を結成しており、将来にわたる東北の民主自治のために、依然として中共とともに奮闘すべきである」と主張した。

しかし、実際には、蒋介石および国民政府は日本の侵略に對して国連の仲裁を要請するとともに、対日抗戦も積極的に準備していた。「九・一八事件」後、蒋介石も「親がなくなるこのように心を痛め」、「東三省を取り戻せなければ、人格もなくなる」と嘆いた。⁽⁹²⁾また蒋介石は様々な機会において、「もし国連によって中日問題が解決できなければ、日本と死ぬま

で戦う」と表明した。⁽⁹³⁾「九・一八事件」後、蒋介石は馬占山らの抗日軍隊を賞賛し、日本に對して「交渉しながら、抗戦を準備する」政策を取っていた。⁽⁹⁴⁾張学良も晩年に数度、不抵抗の命令は国民党中央からのものでなかったことを回想している。⁽⁹⁵⁾一方で、東北抗日聯軍の牽制によって日本関東軍が中国内地に進攻できなかったとは言えない。東北抗日聯軍は一九三四年から一九三六年にいたるまでの間、人数が一番多い時期であっても、三万人余りしかいなかった。⁽⁹⁶⁾その内、非中共系の軍隊が半分を占めていた。三万人によって、数十万人の日本関東軍および満洲国軍を牽制することはできないであろう。また、日本関東軍の駐留目的はソ連の侵攻を防ぐこととあり、東北抗日聯軍を消滅するためではないと考えられる。一九四一年までに、東北抗日聯軍は千人足らずになり、ソ連領内に撤退した。特に、一九四二年「日ソ不可侵条約」が締結されると、東北抗日聯軍の対日作戦がソ連側によって許されなくなった。そして、一九四五年になると、東北抗日聯軍は既に国際八八旅としてソ連極東軍の系統に編入され、事実上、東北抗日聯軍という系統は消滅している。⁽⁹⁷⁾

それにも関わらず、『東北日報』の記事では、東北の陥落などの罪を蒋介石および国民政府に押しつけて、東北民衆の日本に對する民族的な恨みを、蒋介石および国民政府へ転嫁しようとした。それによって、蒋介石および国民政府は、東北の解放に功績がないのみならず、東北を売渡した売国奴として罪があるから、東北を接収する資格がないと主張してい

た。その一方で、国民党側の抗日義勇軍などの活動を低く評価し、東北抗日聯軍の抗日功績を誇張して宣伝することによって、東北抗日聯軍が抗日の軍隊であるから、それを指導していた中共も抗日の組織であると主張した。このようにして、中共こそが愛国者であり、東北を接収する資格があるとし、中共の支配の正当性を主張しようとした。

中共が東北抗日聯軍の功績の宣伝に力を注ぎ始めていたこの時期の一九四六年三月九日、元東北抗日聯軍第三路軍総指揮の李兆麟が殺害された。日中戦争中にソ連領内に逃れ、国際第八八旅の政治副旅長となった李兆麟は、戦後ソ連赤軍の東北進攻とともに中国に帰還し、ハルビンの中ソ友好協会の会長を担任したのであった。中共内部では李兆麟に対する評価があまり高くなく、李はむしろソ連との深い関係や国民党との関係が取り沙汰される人物であった。東北抗日聯軍將軍の馮仲雲は、「李兆麟はよい指導者ではなく、野心があり、よい黨員ではない」⁽¹⁰⁾、「もともと私はハルビンに派遣され、李兆麟は瀋陽に派遣された。しかし、瀋陽は関内に近く、かつ李兆麟の立場は安定してないから、私は瀋陽へ、彼がハルビンに派遣されることになった」⁽¹¹⁾と回想している。張聞天の秘書何方は「李兆麟は主にソ連赤軍の命令に従い、思想が右寄りである」⁽¹²⁾と評価した。関内幹部と東北抗日聯軍將軍との間にも様々な矛盾・対立が存在していたようである。一九四八年六月、中共東北局は、東北抗日聯軍同志が「党性原則」(黨員としての原則的な立場)が弱く、党の指導地位に対する認識が不足していると指摘したこともあった⁽¹³⁾。国民党側接収人員の陳紀澄は「李兆麟は自分がソビエト連邦共産党であり、中共ではないと表明し、彼が内戦を好まず、国民政府への接近を行い、李兆麟の暗殺は中共の内部の矛盾により行われた」⁽¹⁴⁾と回想している。東北行營經濟委員會主任委員張嘉璈は、東北行營接収主任であった熊式輝に「李兆麟はソ連軍に支持されており、延安と一致していない。彼に何かの職を委任してこそ、彼の軍隊を国府軍に改編できる」と進言している⁽¹⁵⁾。それにもかかわらず、李兆麟の殺害は東北抗日聯軍の功績をアピールする中共の宣伝に格好の材料を提供したのである。

一九四六年三月一三日、陳雲は、李兆麟を殺害した犯人が不明であるにも関わらず、「李兆麟の殺害は国民党特務反動派が現在の反ソ反共高潮の下に政協決議および全国平和民主を破壊する陰謀である」と断定し、「李の殺害の状況および彼の履歴を『東北日報』に発表せよ」と指示した。そして宣伝では、「広大な社会人士および人民の支持を獲得するとした一方、国民党反動派の特務活動にも反対する」ために、「李兆麟は東北における抗日の英雄であり、十四年間東北の抗日戦争を堅持した。東北の解放後、彼は積極的に地方の治安を維持し、国共合作と東北の民主平和を主張したため、北満の人民に擁護されていた」という内容を宣伝するよう指示した。さらに、「各省はある程度の軍隊(非武装の)を派遣して追悼会に参加させ」、「追悼会において、我々は人民政府が犯人を処罰し、特務活動を取り締まり、人民の生命安全を確保し、

民主を実現し、共産党の合法地位を承認し、政協決議を履行し、東北問題を平和的に解決すべきであるという要求を提出しなければならぬ」と命じた。最後に、周保中に対して、東北抗日聯軍の名義で「国民党に犯人を探して逮捕し、特務組織を取り締まるように要求する他、東北問題の平和解決や抗日聯軍の承認も提出すべきだ、という全国通電を發せよ」と指示した。

さらに、東北局も李兆麟記念の通知を下した。上述の陳雲の指示のように「李兆麟が国民党反動派に殺害された」こと以外に、東北抗日聯軍の抗日の功績を重心的に宣伝し、国民党反動派の陰謀を暴き出し、これらを通じて対国民党軍の作戦のために民衆を動員しようと指示したのである。

『東北日報』は指示に従い、「李兆麟は国民党内のファシズム反動派に殺害されたのであり、責任は国民党側にある」と断定した。その宣伝では、「国民党が接収した長春、瀋陽、ハルビン」のみならず、「全国各地の国民党に統治されている街では、暗殺、逮捕などのテロの雰囲気満ちており、特務活動により、人民の安全と民主の權益を保証できない」と主張した。そして、李兆麟を追悼する一方、全国の愛国人士と民主人士および平和を望むすべての人民に、みなが団結して勝利の結果を守ろう、と警告した。ここから、自己の主張を実現するために、中間派などに対して共同で「国民党反動派」に反対することを呼びかける中共の意図を読み取ることができる。

抗日英雄を殺害した「国民党反動派」は売国、特に東北を売り渡した犯人だと断定し、李兆麟事件の宣伝においても、中共自身の政治要求を提起した。単に犯人の処罰を求めるのみならず、特殊な事件を拡大して、「中共政權を承認し、民主聯軍の地位を確定する」要求を提起したのである。中共は、李兆麟事件を拡大して政治意味を付与する姿勢を明らかにし、同事件は中共の東北抗日聯軍に関する宣伝の重要な一環になった。李兆麟事件は、ソ連赤軍に駆逐されて浜県に駐留した中共軍が李兆麟を追悼し、犯人を探して逮捕するという口実により、再び北滿の中心であるハルビンに入り、国民政府接収人員を駆逐して、北滿に根拠地を樹立する上で、重要な契機となったのである。

終わりに

これまで検討した東北における中共の宣伝戦略について、最後にここで整理しておきたい。

まず、東北に進入した中共組織や軍隊がソ連軍の保護下に展開したこと、ソ連およびソ連軍に対する全面賛美によってソ連軍の略奪、暴行を隠し、ソ連の否定的なイメージを一新しようとした他、ソ連式の社会主義社会の経済的繁栄、政治における民主、人民の幸福な生活のイメージをアピールして、生活苦に陥り戦乱を嫌悪する東北民衆にソ連と同じイデオロギーを持つ中共が東北民衆を率い、ソ連式の社会主義

の繁栄を実現し、民衆が平和、平等かつ幸せに生活できると
いう将来像を示した。中共は、このような宣伝によって東北
民衆の支持をえようとしていたという。

また、反ソ愛国運動の衝撃を受け、中共宣伝機関はソ連の
権威を維持することに尽力する一方で、ソ連軍が撤退して中
共の東北地方政権および東北民主聯軍の正当性に疑義を呈す
る世論が盛り上がると、中共は東北に政権と軍隊を維持する
ための新たな根拠を提示する必要性に迫られた。中共の宣伝は、
東北抗日聯軍の抗日の功績をアピールしながら、国民政府の
「罪」を拡大して宣伝した。さらに、偶然に発生した「李兆
麟事件」を巧妙に利用して、中共および東北抗日聯軍の抗日
功績の宣伝を強化した。

以上のように、中共は東北における統治を正当化するため
に、その政策を調整し、それにともない、中共宣伝の方針も
変化していた。したがって、「東北解放の功績」も「ソ連赤軍」
から「中共の指導に基づいた東北抗日聯軍」の功績へと変化
し、抗日戦争を堅持していた愛国者の中共こそが、東北を統
治する正当性を持つはずであると、東北社会の世論に訴えた
のである。

最後に、本論では中共の宣伝政策の効果について、十分に
検討することができなかった。高華氏が指摘したように「中
共の勝利はまず軍事的な勝利である」といえるが、中共の宣
伝活動は軍事勝利の実現を加速させ、軍事勝利の結果を強化
したと考えられる。中共の宣伝は中共および東北抗日聯軍の

功績を繰り返して宣伝して、「中共の東北占領の正当性」を東
北民衆に訴えた。それによってたとえ限定的であったとして
も「東北民衆の中共に対する理解を促進した」ことは、やは
り否定はできないであろう。

この問題の検討には内部史料の発掘・分析など、宣伝その
ものの分析とは異なるアプローチが必要であり、ここで十分
に議論を展開することができないが、ソ連イメージの宣伝に
ついて内部史料に即して若干の指摘をしておきたい。

一九四六年二月、東北現地のソ連情報人員はモスクワに対す
る報告の中で、中共占領区における共産党組織の合法化にと
もない、樹立された群衆民主聯盟と協会などは東北民衆に対
して政治工作を行い、それによってソ連およびソ連軍の影響
を強化し、東北民衆はソ連に対して友好的な感情を持つてい
ると指摘している。しかし、中共はソ連賛美などの宣伝を通
して、東北民衆および中共人員のソ連に対する嫌悪感を一掃
することはできず、中共系の人々の中でも反ソ的な言動が行
われていた。例えば、一九四七年末、東北中東鉄道管理局中
共人員の黄逸峰はソ連人の大国主義に対して不満を持つてお
り、晩餐会で中国女性をからかった鉄道管理局のソ連人を激
しく叱責した。左派作家蕭軍は「無条件にソ連を擁護する」
ことに賛成せずに、ソ連人を「本当のソ連人民」と「犯罪を
犯したソ連人」に分けて対応すべきだと主張し、さらに
一九四八年『文化報』においてソ連を「赤色帝国主義」と批
判する言論を展開して、「反ソ反共反人民」のレッテルを被

せられた。⁽¹⁰⁾さらに、大勢の人々が一九五〇年代の三反運動において、反ソ分子として弾圧されている。宣伝によるイメージ改善の一方で、言論統制や政治闘争などによる異論の排除を通じて、中共やソ連に対する支持が社会に定着していったことは言を俟たないであろう。この問題に関する検討は今後の課題としたい。

註(1) 牛軍「論中蘇同盟の起源」『中国社会科学』一九九六年第二期、沈志華「蘇聯出兵中国東北：目的和結果」『冷戰的起源』九州出版社、二〇一三年、楊奎松「中間地帯的革命」山西人民出版社、二〇一〇年。

(2) 丸山鋼二「戦後満洲における中共軍の武器調達—ソ連軍の『暗黙の協力』をめぐる』『近代中国東北地域史研究の新視角』山川出版社、二〇〇五年、同「戦後初期の満洲における中国共産党の『政府』樹立工作」『文教大学国際学部紀要』第一六巻一号、二〇〇五年。

(3) 飯塚靖「国共内戦期・中国共産党による東北根拠地での兵器生産」(I)(II)(III)『下関市立大学論集』第五七巻第三号、二〇一四年、第五八巻第二号、二〇一四年、第五八巻第三号、二〇一五年。

(4) 政治戦略の運用、近代的兵器の競争、戦場における兵士の戦闘の三つの戦線の他、宣伝戦が第四戦線とされている。汪学起、是翰生『第四戦線—国民党中央広播電台撥実』中国文史出版社、一九八八年。

(5) 中共湘贛省委常委会「宣伝鼓動工作決議」(一九三二年六月一九日)、劉雲『中央蘇区文化芸術史』百花洲文芸出版社、

一九九八年、四〇、八七頁によれば、これはレーニンが語った言葉とされる。

(6) 高狄「堅持党報的党性原則」、人民日報海外版編『論党的新聞工作』人民日報出版社、一九九〇年、四八頁。

(7) 余敏玲「偉大領袖への人民公敵、蒋介石形象塑造与国共宣傳戦(一九四五—一九四九)」『蔣介石与現代中国的形塑』第一冊「領袖的淬煉」中央研究院近代史研究所、二〇一三年、八八—一二五頁。

(8) 余敏玲「学習蘇聯—中共宣伝与民間回応」『中央研究院近代史研究所集刊』第四〇期、二〇〇三年、九九—一三九頁。

(9) 鄭成「国共内戦期の中共・ソ連関係—旅順・大連地区を中心に」御茶の水書房、二〇一二年、一六五—二二頁。

(10) 梅村卓「中国共産党のメディアとプロパガンダ—戦後満洲・東北地域の歴史的展開」御茶の水書房、二〇一五年。

(11) 梅村卓「李兆麟暗殺事件をめぐる記念とプロパガンダ」『東洋学報』第九五巻、二〇一三年、二九一—三一九頁。

(12) 迪特・海因茨希(Dieter Heinz)張文武、李丹琳訳「中蘇走向同盟の堅難歷程」新華出版社、二〇一一年、一四八頁。

(13) 江沛、紀亜光「一九四六年二月反蘇運動述評」『江西師範大学学报』第三六巻第一期、二〇〇三年一月、六五—七二、七八頁、と饒品良「戦後中蘇東北問題交渉与国統区の民衆反蘇運動」『俄羅斯研究』第一三九期、二〇〇六年第一期、六五—六九頁、は、「反ソ運動は国民党反動派の反共陰謀である」という中共の一貫した主張を否定して、「反ソ愛国運動」は青年学生および社会各界による愛国心に基づく愛国運動であったと指摘している。

(14) 「希金致莫洛託夫報告—東北民衆対蘇聯の態度」(一九四六年二月二日)、沈志華編『俄羅斯解密檔案選編—中蘇關係』

第一巻、東方出版中心、二〇一四年、一三六一—一三七頁。

(15) 彭真「我們的任務是爭取全東北」(一九四五年十月二十六日)、中共中央文獻編輯委員會「彭真文選」人民出版社、一九九一年、一〇五頁。彭真是「東北民衆は國家觀念、民族觀念が強いが、階級觀念が曖昧である」と指摘している。

(16) 遼寧省日報社編『東北日報簡史』遼寧日報社、一九八八年、一—四、二二五—一四四頁。

(17) 陸定一「我們對於新聞學的基本觀點」『解放日報』一九四三年九月一日。

(18) 胡喬木「報紙是人民的教科書」『解放日報』一九四三年一月二六日。

(19) エドガー・スノー著、小野田耕三郎、都留信夫訳『中共雜記』未來社、一九六四年、九〇頁。

(20) 「堅持黨報的党性原則」、前掲『論黨的新聞工作』、四六頁。

(21) 「彼得羅夫与赫爾利談話紀要・赫爾利訪蘇情況」(一九四五年五月一〇日)、前掲『俄羅斯解密檔案選編・中蘇關係』第一卷、三四頁。

(22) 「斯大林与中国内戰的起源」、前掲『冷戰的起源』、一五七頁。

(23) ソ連は「ヤルタ協定」および「中ソ友好同盟条約」を通じて米國と國民政府から獲得した「外モンゴル現状維持、中東鐵道の中ソ共營、大連旅順のソ連特權」を確保するために、一九四五年八月二〇日、毛沢東に「中国に内戰の發動は許されず、毛沢東は重慶談判に参加すべきである」と勧めた。沈志華『中蘇關係史綱』社会科学文献出版社、二〇一二年、九二—九三頁。

(24) 蔣介石は、一九四五年八月一四日、二〇日、二三日の三回にわたって、毛沢東に「國事を協議するために重慶を訪問する」よう要請した。「蔣主席邀毛沢東來渝共商國事電」(一四

日)、「蔣主席再電毛沢東昭示終結内争不容再有并促速來渝文」(二〇日)、「蔣主席三電毛沢東盼与周恩来同來渝商談文」(二三日)、中国国民党中央委員會党史委員會『中華民國重要史料初編 対日抗戰時期第七編・戰後中国』(二)、國史館、二〇一二年、二七—二八、二八—二九頁。

(25) 「国民党政府与中共代表談判紀要」『重慶談判史料』四川人民出版社、一九八〇年、一九—二三頁。『解放日報』一九四五年一月二日。

(26) 汪朝光『中華民国史』第三編第五卷、中華書局、六四—六六頁。

(27) 「中央關於集中主力拒止蔣軍登陸給東北局的指示」(一九四五年一月九日)『中共中央文件選集』第一五冊、中共中央党校出版社、一九九一年、三六四頁。

(28) 「斯大林与中国内戰的起源」、前掲『冷戰的起源』、一七二—一七三頁。

(29) 李鴻文、張本政『東北大事記』吉林文史出版社、一九八七年、一〇四九、一〇五一頁。

(30) 「増兵東北之部署」(一九四五年一月四日)、中共中央文獻研究室編『毛沢東文集』第四卷、人民出版社、一九九六年、六三頁。

(31) 呂芳上主編『蔣中正先生年譜長編』第八卷、國史館、二〇一五年、一九一、二二四頁。

(32) 一九四五年二月二七日、中共代表團の周恩来は國民政府に無条件停戰という意見を提案した。中共側は國民政府と交渉して、一九四六年一月五日に「停戰協定」に合意し、一〇日に「關於停止衝突回復交通的命令与声明」を発表した。

(33) 「政治協商會議通過五項提案全文」『中央日報』(重慶版)一九四六年二月一日。

(34) 「毛沢東關於抗戰勝利後的方針給饒漱石等的指示」
(一九四五年八月二四日)『中共中央文件選集』第一五冊、
二四五一—二四六頁。

(35) 重慶市政協文史資料研究委員會『政治協商會議紀實』重慶
出版社、二〇一六年、五五九—五八〇頁。

(36) 前掲「偉大領袖の人民公敵・蔣介石形象塑造与国共宣傳
戦（一九四五—一九四九）」。

(37) 前掲「蘇聯出兵中国東北…目的和結果」、一四八頁。

(38) 薛衛天「蘇聯拆運東北機器設備評述」、中国社会科学院近
代史研究所『近代中国与世界』第一卷、二〇〇五年、
六三九—六五一頁。前掲「蘇聯出兵中国東北…目的和結果」。

蔣清宏「蘇軍拆遷東北工廠業与戦後賠償研究」『抗日戰爭研究』
二〇〇四年第二期、一七六—二〇八頁。

(39) 姜万里「中蘇團結旗号下的強迫失憶」『炎黄春秋』二〇
一二年第八期、五七—五九頁。前掲「學習蘇聯…中共宣傳与
民間回應」。潘鵬「中国民衆『疑蘇』情緒研究（一九四六—
一九五〇）—兼談中蘇友好協會成立的原因」『成都大學學報（社
科版）』二〇〇八年第二期、三三頁。山大柏「我是日軍翻譯官—
偽滿「江上軍」親歷記」、春風文芸出版社、二〇〇〇年、
四五—一四五二頁。

(40) 劉德榮「黃克誠率部進軍黑土地」『炎黄春秋』二〇〇一年
第二期。

(41) 前掲「中蘇關係史綱」、九二—九三頁。

(42) 張莘夫は吉林省長吉出身であり、著名な中国地質専門家で
ある。一九四六年一月中旬、東北行營經濟主任張嘉璈の命令
を奉じ、撫順へ石炭鉱場の接収に赴いたが、ソ連赤軍および
中共軍に阻止された。接収失敗後、一九四六年一月一六日、
瀋陽への帰途、李石寨において他の八人とともに東北民主聯

軍の莫広成らに殺害された。「張莘夫案調査報告書」、「国防
部判決書」、前掲『中華民国重要史料初編 対日抗戦時期第
七編・戦後中国』（二）、三三〇—三三四、三三九—三四一頁、
朱戎「張莘夫遇害事件真相考」『炎黄春秋』二〇一三年第三期。

(43) 東北民主聯軍は東北自治軍から改名された中国人民解放軍
第四野戦軍の前身部隊である。一九四五年八月以降、ソ連と
国民政府との合意により、ソ連は東北の政權を国民政府に移
管したが、その際、ソ連の外交義務に配慮して、東北に進入
した中共軍は八路軍や新四軍の番号を使わずに、人民自治軍、
地方自治軍、保安団などを名乗ることとなった。一月三十一
日、中共中央軍委の指示により、東北における八路軍、新四
軍および東北抗日聯軍を基礎に発展した東北人民自衛軍、改
編された各中共軍を統一して東北人民自治軍に改名した。さ
らに、一九四六年一月一四日、東北における東北人民自治軍
は東北民主聯軍に改名した。中国軍事科学院軍事歴史研究部

『中国人民解放軍全史』第五卷、軍事科学出版社、二〇〇〇年、
一一—一〇頁、「東北抗日聯軍史」中共党史出版社、二〇一五年、
一〇二八—一〇三四頁、趙俊清『周保中伝』黑龍江人民出版社、
二〇一一年、五六三—五七八頁など。

(44) 「誠懇切東北問題沙磁区大中学生今來滬遊行」『中央日報』
一九四六年二月二日。

(45) 国民政府とソ連政府は、ソ連軍が満洲に進入した後、三か
月以内に全軍撤退することを合意した。しかし、ソ連は長期
的に東北を統制するために、経済協力上の独占的な地位を国
民政府に強要した。また、国共対立を利用して国府軍の東北
進出を阻止していた。一方で、国民政府はソ連軍の撤退後、
国府軍が到達しないうちに、東北が中共に占領される恐れが
あると考えて、本来一九四五年一月に撤退すべきソ連軍に

- 撤退延期(一九四六年二月まで)を要請した。しかし、その期限になっても、東北における中ソの経済協力協定を達していないため、ソ連は軍を撤退させないと国民政府に圧力をかけていた。前掲「蘇聯出兵中国東北…目的和結果」冷戦的起源、一五一頁。「外交部致駐外各使領館告接防東北困難情形即蘇方態度電」(一九四五年一月一七日)、「外交部為延期撤兵事致蘇聯駐華大使館照會」(一九四五年二月二四日)、前掲「中華民国重要史料初編対日抗戰時期第七編・戦後中国」(一)、一五一、一六八頁。
- (46) 「重慶市二万余学生昨举行愛国大遊行」『中央日報』一九四六年二月二三日。
- (47) 「質中共書」『中央日報』一九四六年二月二三日。
- (48) 「維護東北領土主權西南聯大教授宣言」『大公報』(天津版)一九四六年二月二七日、「対東北局勢表示民意平津今有遊行示威」『大公報』(天津版)一九四六年二月二六日、「大学教授聯合会呼吁保衛主權」『民国日報』一九四六年二月二六日。「我們對於雅爾達秘密協定の抗議」『申報』一九四六年二月二五日。
- (49) これは第一次および第二次「カラハン宣言」のことを指す。
- (50) 「社論」『大公報』(天津版)一九四六年二月一六日。
- (51) 「東北的陰雲」『大公報』(重慶版)一九四六年二月一八日。
- (52) 「社論 愛国与排外」『新華日報』一九四六年二月二五日。周恩来は「愛国と排外を区別すべきであり、愛国を擁護すべきで、排外を避けるべきである」と発言した。これに基づき、『新華日報』は、愛国民衆による反ソ運動は反動派に利用され、変質させられたため、民主勢力を弾圧し、国益を害する排外運動になったと主張した。
- (53) 「向蘇聯抗議 向中共忠告」『申報』一九四六年三月三日。
- (54) 「全国注視収復東北要求蘇軍撤退」『民国日報』一九四六年二月二四日。
- (55) 「長春鉄路の過去与現在」『東北日報』一九四五年一月八日。
- (56) 「延安記念十月革命節大会 電斯大林元帥致賀」『東北日報』一九四五年一月一〇日。
- (57) 「御敵互相援助条約」、「合弁東省鉄路公司合同章程」、王鉄崖「中外旧約章匯編(第一冊)」、生活・読書・新知三聯書店一九五七年、六五〇—六五一、六七二—六七五頁。「中蘇友好同盟条約」、「關於中国長春鉄路之協定」、王鉄崖「中外旧約章匯編(第三冊)」、生活・読書・新知三聯書店、一九六二年、一三二七—一三三四頁。
- (58) 楊奎松「毛沢東与莫斯科的恩怨怨」江西人民出版社、一九九九年、二八八頁。
- (59) 師哲「我的一生 師哲自述」人民出版社、二〇〇一年、三〇一頁。
- (60) 遲子祥は山東省蓬萊人である。一八九九年に大連に入つて、ロシア語を学び、日本占領期間に益泰祥雜貨店の経営に着手した。一九一三年、大連在住の山東人の權益を守るために組織された山東同郷会の副会長となった。一九三〇年代にいたつて副会長を辞任したが、中国人の權益を保護するために、日本占領当局に対する闘争を継続した。一九四五年以後、彼は大连自衛委員会の副会長に就任した。ソ連軍が大連に入つてから、遅はソ連占領軍司令官との関係がよくなり、信任されていた。したがって、商人であつた遅は駐大連ソ連占領軍司令官が提案し、モスクワが許可して、大連市長に任命された。一九五一年に遅は反革命の罪で銃殺された。大連史志弁公室「大連市志・財政志」中央文献出版社、二〇〇二年、一五三—一五四頁。
- (61) 「実行民主自治 大連市政府成立」『東北日報』一九四五年

一月二日。

(62) 「救済大連失業工人 紅軍応工会要求 発救済金五百万」『東北日報』一九四五年一月二日。

(63) 韓光「旅大八年」大連史志弁公室「蘇聯紅軍在旅大」、一九四五年、三六頁。

(64) 同右、三九頁。

(65) 前掲「中華民国重要史料初編 対日抗戦時期第七編・戦後中国」(一)、二七四―二七五頁。

(66) 韓光「旅大八年」、柳運光「我所了解的蘇軍」、唐韵超「日本投降後蘇軍在大連的情況」、前掲「蘇聯紅軍在旅大」、五四、八二、八六頁。

(67) 「遠東持久和平的基石」『解放日報』一九四五年八月二九日。

(68) 「中蘇友好同盟条約全文」『解放日報』一九四五年八月二十七日は、条約の全文というタイトルをつけたが、その中にはモンゴルに関する協定の内容を載せていなかった。

(69) 「内蒙人民慶祝外蒙独立」『東北日報』一九四六年一月二九日。

(70) 同右。

(71) 張家口の所在する晋察冀辺区は内蒙モンゴル地域に隣接しており、『晋察冀日報』では、中共が内蒙モンゴル人と連合して内蒙モンゴル自治を行うことを主張していた。『東北日報』は東北人向けの新聞であるから、敏感な民族問題については慎重な態度を取っていたことが分かる。『團結胜利的篇章 中国共产党領導内蒙自治運動史実簡編』(国家民委研究室・内蒙自治区民委編、中共党史出版社、二〇一一年)、内蒙自治運動聯合会档案資料選編(内蒙自治区档案馆編、档案出版社、一九八七年)を参考した。

(72) 前掲「冷戦的転型」、五一頁。

(73) 「十月革命的故事」『東北日報』、一九四五年一月八日。

(74) 同右。

(75) 「記念十月革命廿八周年 瀋陽舉行盛大慶祝会」『東北日報』、一九四五年一月二日。「延安各界隆重慶祝 蘇聯十月革命節 号召全国人民起来制止内戦」『東北日報』一九四五年一月一日。

(76) 呂清「合江兩年」中共佳木斯市委党史工作委員会・佳木斯市志編審委員弁公室「佳木斯党史資料」第一輯、一九八五年、一三三頁。

(77) 「東北大学五百余聯合入関赴平請願」『大公報』(天津版)、一九四六年三月一日。

(78) 施応霆「軍調部東北執行小組談判軼事」『百年潮』二〇〇一年第二期。

(79) 「北平執行部」は、北平における米国および国共両党の代表が参加し、「停戦令」の実施、停戦の実現を督促する機構である。一九四六年二月二日、北平における反ソデモの人々に攻撃される事件が起きた(中共はこの事件を国民党反動派が行った反共活動だと主張した)。

(80) 「中央関於国民党反動派發動宣傳反攻及応注意事項的指示」(一九四六年二月二五日)『中共中央文件選集』第十六冊、中共中央党校出版社、一九九一年、八三―八四頁。

(81) 同右。

(82) 同右。

(83) 「重慶反蘇反共示威遊行 現係国民党反動派陰謀」『東北日報』一九四六年三月三日。

(84) 「重慶国民党反動派 搗毀新華日報」『東北日報』一九四六年三月一日。

(85) 「重慶事件与東北問題」『東北日報』一九四六年三月二日。

(86) 同右。

- (87) 「東北名流閻宝航主張 東北人民軍隊抗戦有功東北行營省府応加改組」『東北日報』一九四六年三月二日。
- (88) 「東北元老名流 反対武力解決東北問題 大家一致賛同中共主張」『東北日報』一九四六年三月二日。
- (89) 閻明復「我父親閻宝航の情報生涯」『炎黄春秋』二〇〇五年第二期、一〇頁。
- (90) 「如果政治真正民主 東北問題即可解決 民主同盟主席張瀾語記者」『東北日報』一九四六年三月二日。
- (91) 「国民党法西斯分子 強迫学生参加反蘇反共遊行 燕大学生不為威武所屈堅決拒絕」『東北日報』一九四六年三月四日。
- (92) 「中国反動派勾結敵偽残余 在東北進行反蘇活動 武装襲撃紅軍 發動反蘇宣傳」『東北日報』一九四六年三月三日。
- (93) 東北抗日聯軍の「抗日の歴史」を根拠に東北統治の正当性を主張する中共の宣伝戦略と李兆麟殺害事件に関わる宣伝の状況については、前掲梅村論文にも詳細な記述がある。併せて参照されたい。
- (94) 陳雲「建議發表文告声明我对東北的主張」『陳雲文集』第一卷 中央文獻出版社、二〇〇五年、四六四—四六五頁。
- (95) 「彭真伝」編写組「彭真年譜」第一卷、中央文獻出版社、二〇一二年、四〇〇—四〇一頁。
- (96) 「中共中央関于東北宣傳問題給東北局的指示」(一九四六年三月六日)、中共中央宣傳部弁公庁・中央档案馆編研部編『中国共産党宣傳工作文獻選編 一九三七—一九四九』学習出版社、二〇一二年、六一—八頁。
- (97) 前掲『彭真年譜』第一卷、四〇三頁。
- (98) 「周保中將軍答本報記者問」『東北日報』一九四六年二月二十四日。
- (99) 同右。
- (100) 「楊靖宇和他的隊伍」『東北日報』一九四六年二月二十八日—三月六日。
- (101) 「中国共産党与東北抗日聯軍十四年闘争史略」『東北日報』一九四六年三月一七日。
- (102) 前掲『蔣中正先生年譜長編』第三冊、五一—頁。
- (103) 同右、五一—五五九頁。
- (104) 「蔣主席致馬占山代主席嘉勉我軍奮勇開摧敵寇」国史館『東北義勇軍』、一九八一年、三〇頁。
- (105) 郭岱君「重探抗戰史(一) 從抗日大戰略的形成到武漢會戰(一九三一—一九三八)」聯経出版事業股份有限公司、二〇一五年、八三頁。
- (106) 唐德剛、王書君「張學良世界伝奇」山東友誼出版社、二〇〇二年、四三四頁。
- (107) 『東北抗日聯軍史』(下) 中共党史出版社、二〇一五年、一〇四四—一〇四五頁。
- (108) 沈志華「試論八十八旅与中蘇朝三角關係—抗日戰爭期間國際反法西斯聯盟一瞥」『近代史研究』二〇一五年第四期、中国社会科学院近代史研究所、二〇一五年、一一—一六頁。
- (109) 李兆麟の本名は李蘭超であり、東北抗日聯軍時期には張壽箋と名乗っていた。
- (110) 訪問馮仲雲同志記録(一九五九年一月十九日)「対開展東北党史研究的意見」『訪問録選編(馮仲雲同志專輯)』黑竜江省社会科学院党史研究所、一九七九年、九頁。
- (111) 訪問馮仲雲同志記録(一九六四年二月三日)「関於滿洲省委・東北聯軍的一些情況」、同右、一七四—二一〇頁。
- (112) 何方「從延安一路走来」人民日報出版社、二〇一五年、一四四頁。
- (113) 「関於正確处理与原東北抗聯同志關係的指示」中共東北局、

- 一九四八年六月。
- (114) 陳紀澄『我的郵員与記者生活』台湾商務印書館、一九八八年、五五—五六七頁。
- (115) 東北行營は滿洲国崩壊後に、国民政府が設置した旧滿洲地域の接収統治機関である。
- (116) 姚松齡『張公權先生年譜初稿』(上) 中国科学文献出版社、二〇一四年、六八二頁。
- (117) 陳雲『陳雲文集』第一卷、中央文献出版社、二〇〇五年、五一—五一九頁。
- (118) 前掲、『彭真年譜』第一卷、四一—三頁。
- (119) 「悼李兆麟同志」『東北日報』一九四六年三月二一日。
- (120) 高華『歷史筆記Ⅰ』牛津大学出版社、二〇一四年、二七三頁。
- (121) 前掲、『東北日報簡史』、七頁。
- (122) 前掲、「希金致莫洛託夫報告：東北民衆对蘇聯的態度」(一九四六年二月二一日)。
- (123) 前掲、『歷史筆記Ⅰ』、二六七頁。
- (124) 姜万里「中蘇団結下旗号下強迫失憶」『炎黃春秋』、二〇一二年第八期、五七—五八頁。